

穴太（あのう）遺跡発掘調査現地説明会資料

令和5年6月18日（日）

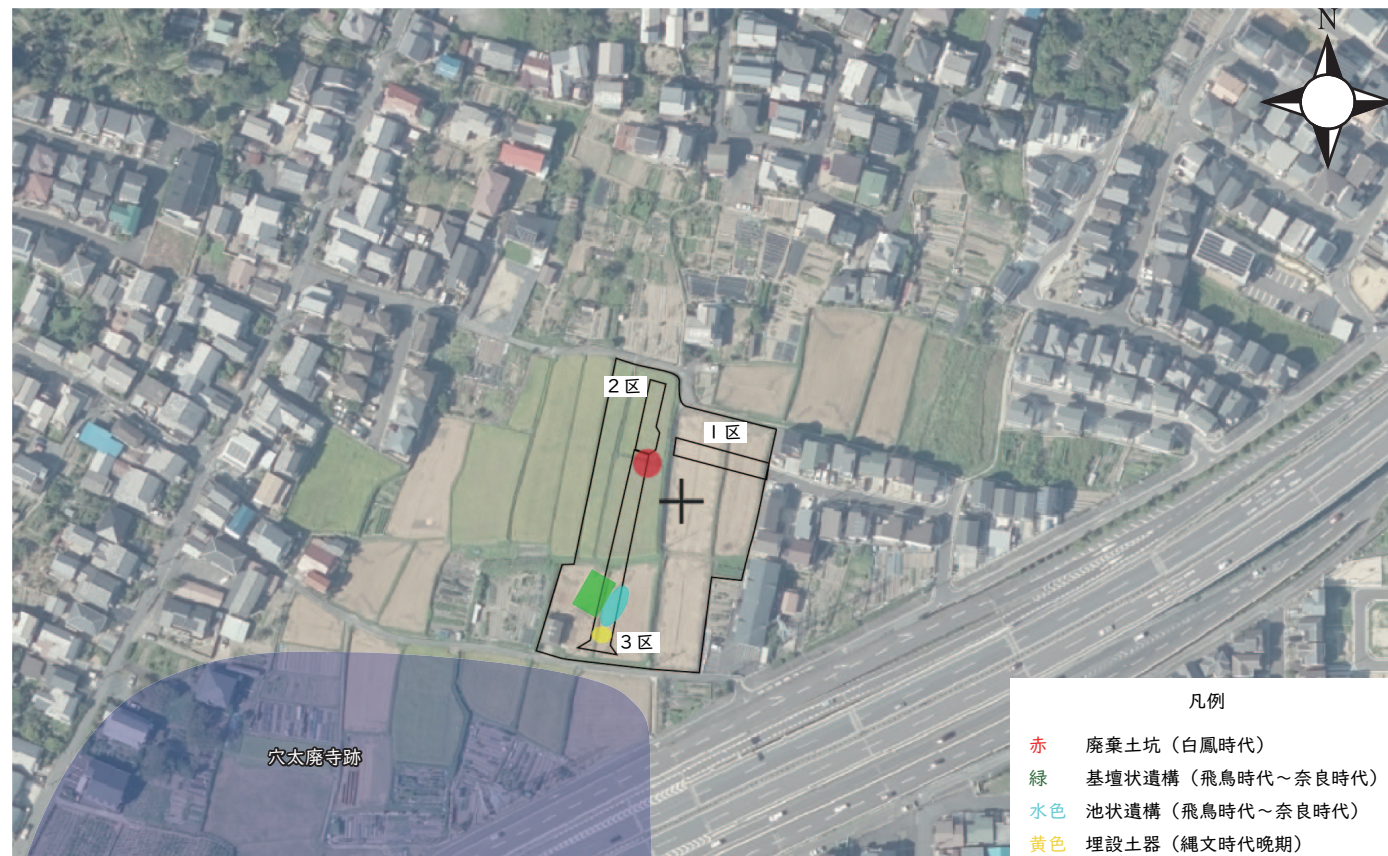
穴太遺跡（下飴屋地区・出口地区）発掘調査の概要

調査期間 令和4年9月～令和5年9月（予定）

調査面積 1594.83㎡

調査原因 宅地造成

調査機関 大津市市民部文化財保護課



調査地の位置と主な遺構の配置（国土地理院地図より加筆）

○縄文時代の埋設土器

3区の南端では、縄文時代の埋設土器が3基確認されました。いずれも縄文時代晩期（約3000年前）のもので、2～3個体の土器が、それぞれ組み合わせり、重なっているように見えます。

今回見つかったような埋設土器は、一般的に胎衣壺（えなつぼ）や子供用の棺などと考えられています。



3区で確認された縄文土器

○白鳳時代の廃棄土坑

2・3区にまたがる土坑では多くの瓦と焼けた土が出土しました。瓦には歪みが生じていたり、焼け土はスサを含んでいることから、瓦窯の残骸がまとまって廃棄されたものと考えました。

廃棄土坑から出土する軒瓦は、後期再建時（大津宮期か）の穴太廃寺で使用されたとされるものと同じ文様のものばかりで、穴太廃寺の瓦窯が近隣にあることを示唆しています。



2・3区の境で確認された複弁八弁軒丸瓦



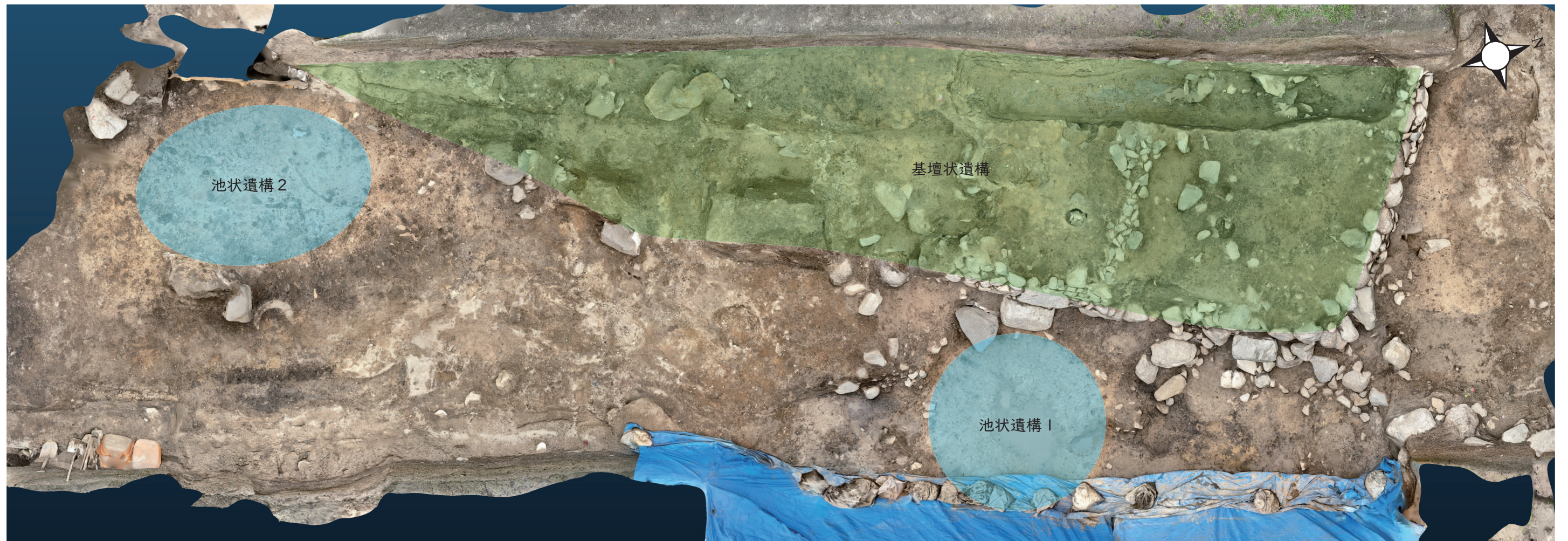
大津市内北西部の航空写真と発掘調査地

○穴太遺跡とは

穴太遺跡は、穴太一丁目、二丁目、唐崎三丁目、四丁目、弥生町に所在し、東西約1.3km、南北1.0kmの広大な範囲に位置しています。遺跡の地勢は、比叡山から延びる丘陵がやや緩やかに変わる地点であり、遺跡範囲の北端である四ッ谷川をはじめとして多くの中小河川により形成された複合扇状地です。

穴太遺跡では、縄文時代から江戸時代までの遺構・遺物が確認されています。その中でも、渡来系の遺構とされる古墳や大壁建物、国指定史跡「穴太廃寺跡」といった6世紀後半～7世紀後半の遺構が多く見つかっています。穴太廃寺跡は、前期（7世紀前半）、後期創建（大津宮以前）、後期再建（大津宮期か）の3時期あるとされ、後期創建時と後期再建時の遺構が確認されています。

今回の調査区は、国指定史跡「穴太廃寺跡」の北側に位置しています。今回の調査では、①縄文時代の遺構・遺物、②白鳳時代の瓦窯を思わせる遺構、③飛鳥時代から奈良時代の池状遺構と基壇状遺構らが確認されました。



上から見た今回の調査地

○基壇状遺構と池状遺構

今回の調査では、「L」字状に積まれた石積みと2か所の粘土を貼った水溜め（池）のようなものが確認されました。石積みと石積みに伴う平坦面は基壇のようにも見えますが、調査地の範囲内では建物の痕跡は確認できていません。しかし、締まって硬い粘土が平坦面に存在することから、なにかしらの面（生活面？）があったものと思われます。

2か所の池状遺構は、約10m離れた位置で確認されました。平面の形は違いますが、およそ30cm凹んでおり、粘土を貼っているという点は共通しています。調査地の大部分が砂地であるのに対して、この部分だけ粘土を張り付けていることは極めて異質です。砂地は水を吸いますが、粘土はある程度溜めることができることから、池のような機能があるのではと考えています。

この2種類の遺構は一体のものであると考えられ、庭園の一部ではないかとの意見があります。庭園であるとすれば、大小様々な大きさの石や、基本白い石の中に一部緑かった色の石を用いた石積みは視覚的変化を生む効果があったと考えられます。その石積みの前には調査地の西側の山々からの流水を利用した池を配し、壺笠山（つばかさやま）や裳立山（もたてやま）などを借景に優れた景色だったのではないのでしょうか。

これらの遺構の時期は、池を覆っていた砂から出土した遺物や、石積みの方角が創建時の穴太廃寺と共通することから、飛鳥時代～奈良時代ではないかと考えています。



基壇状遺構と池状遺構（南から撮影）